

# 本佛實在を中心とせる統融的宗教

——日蓮聖人の宗教「觀心本尊抄」の再認識——

山 川 智 應

—

日蓮聖人の宗教に於いて、法然上人の「選擇集」、親鸞聖人の「教行信證」の如き、その宗旨における最主要なる立典籍を求むれば、何人も「觀心本尊抄」を以てするに躊躇をせぬであらう。故本多日生師は、聖人の「開目抄」を以て、最後の標準御書とし、「觀心本尊抄」は、寧ろ聖人正系の宗教思想を不純ならしめるものがありとせられたが、（同師著「本尊論」）、しかしそれは同師の私論であつて、聖人門下の公論としては、「觀心本尊抄」を以て最高標準の書とするに、殆んど異論はないのである。

而して本多師が、「觀心本尊抄」を以て、聖人の宗教を不純ならしめるところあるものとされたのは、師は「開目抄」の本佛實在の教義を以て、聖人の正系思想としてゐられた爲め、「本尊抄」に『我等ガ己心ノ釋尊ハ、五百塵點乃至所顯ノ三身ニシテ、無始ノ古佛也』といひ、また『上行・無邊行・淨行・安立行等ハ、我等ガ己心ノ菩薩也』といひ、本佛・本化を以て、凡夫の己心中の存在とし、内在内觀の宗教となつてゐるのは、天台の一念三千に基く傍系の思想で、外部における本佛實在の正系思想を、稀薄化せしむるものであるとし、彼の日蓮宗近世の精學、優陀那日輝師や

信念の篤學一妙日導師が、『己心本尊』または『己身本佛』をいひ、または『本尊ノ實體ハ行者ノ色心』等といへるを以て、これ「觀心本尊抄」に基けるものとして、「本尊抄」を要せず、「開目抄」にして足るといひ、一念三千は天台の教學、大曼荼羅は眞言の影響などといはれたものである。

しかしながら、一念三千は、「開目抄」においても、その各論は勿論、通論においても佛教最高の思想とせられ、大曼荼羅は「本尊抄」に、法華經本門八品の所顯としてゐられるのは、本經と何等の支牒なく一致するのであるから、本多師のかゝる所論が、一私言として聖人門下の學者に容れられなかつたのは、止むを得ないところである。だが、師のそれ等の聖人の遺文を無視した所説は、吾等もまたこれを排するものではあるが、師をしてさやうなる所説を爲さしむるに至りし所以の動機においては、また深く同情するところあるものである。

それは明治四十三年の初夏の交であつた。私は南品川本光寺に顯本法華宗の講演のあつた日、師をその寺の書院に訪ねた。席には今の同宗管長井村日感師はじめ、寺主の今成師および笹川・山根？等の諸師が五六名、中川日史師はまだ大學生で、接待をしてゐられたと記憶する。その時に本多師は、「開目抄」にして足る、「本尊抄」を要せずとの意見を出され、私は「本尊抄」がなければ、將來の宗教としての日蓮主義の資格に闕くる所ありとし、また師は大曼荼羅は多くの佛菩薩と諸神の羅列にして、唯一本佛の觀念に便ならずとせられ、私はそは佛・菩薩・諸神の羅列にあらず、本佛の一念三千その果報境界にして、諸宗の本尊が佛の外相を以てするに對して、本佛釋尊の精神界を以て本尊とするから、本門觀心の本尊とするなりとし、一時間餘に互つて論談し、他の人々は一言も挿まなかつたが、恰かも師の出演の時間が來たので、『僕の立場は宗教學だから』と言ひ殘して席を起された。

その後、師の主管せられてゐた「統一」雑誌上に、大曼荼羅本尊授與の廣告が、大正の初年から數年間出てゐたがその末年になつて、師は「本尊論」を出して、再び一念三千は天台の教學、大曼荼羅は眞言の影響と主張し、「開目抄」にて足る、「本尊抄」を要せずと論ぜられたので、その理由は『已心本尊』だの、『已身本佛』などいふものは、佛陀を拜むのか自己みづからを拜むのか判らないもので、さやうなものは宗教とすることは出来ない。「觀心本尊抄」といへども、その末文には、『一念三千ヲ識ラザル者ニハ、佛、大慈悲ヲ起シ、五字ノ内ニ此ノ珠ヲ裏ミ、末代幼稚ノ頸ニ懸ケサシメタマフ。四大菩薩、此ノ人ヲ守護シタマハシト、大公周公ノ成王ヲ攝扶シ、四暗ガ惠帝ニ侍奉セシニ異ラザル者也』と結ばれて、『已心本尊』や、『已身本佛』といふが如き意味はないではないか。俗にはゆる十界羅列の大曼荼羅を本尊とし、十界五具などいふものだから、その中の佛・菩薩・諸神の一を別勸請して、本尊とする本尊雜亂を生じ、『已心本尊』『已身本佛』などいふものだから、謙遜を忘れたる自我主義の我慢人を生ずるのである。これが本多師の主たる趣旨であつた。我等を以て見れば、その所論の動機は同意するが、所論そのものは排せねばならなかつた。何となれば、大曼荼羅は決して師のいはるゝ如く、佛・菩薩・諸神の羅列でなく、「本尊抄」は決して『已心本尊』や、『已身本佛』などいふことを説かれたものでないからである。

こゝにおいてか、「觀心本尊抄」の再認識といふことが、本多師と同論を抱く人の側に對しても、『已心本尊』や、『已身本佛』を「本尊抄」の主旨の如くいふ人の側に對しても、根本的必要となるのである。

故村上專精博士の「佛敎統一論」の「佛陀論」を見ると、日蓮宗の大曼荼羅本尊を以て、法身なりとしてある。これはおもふに優陀那院日輝師の、「本尊辨」および「本尊略辨」に依られたものとおもふが、今日他の一般佛敎學者の

日蓮宗の本尊に對する常識は、また村上博士の見と多くの異るところはあるまいかとおもはれる。爾かする時は、「觀心本尊抄」の再認識は、聖人門下の爲めだけでなく、現日本佛教學界の、全體に向つての必要であるといはねばならぬ。これここに、本論題を掲げて、その一端を闡明せんとする所以である。

## 二

昨年は、日蓮聖人が文永十年四月廿五日に、「觀心本尊抄」を撰せられてから、滿六百六十六年であるが、私は偶然この陽曆四月廿五日から、七月八日の大曼荼羅顯發會までに、四ヶ年來の懸案であつた、「觀心本尊抄講話」六百頁の執筆を完了した。そしてはじめて本抄が、聖人の

超越的なる本佛實在を中心として、普遍的なる内在内觀の宗教と、儀表的なる實現實踐の宗教を、圓滿に統融具足したる、豫言的宗教を建設せられたものであることに、今更ながらに驚いたのであつた。

聖人の宗教が、超越的一神教的なるものと、普遍的汎神教的なるものと、實現的倫理教的なるものとの、三方面によつて構成せられ、それは法華經本門の、心・佛・衆生の三法、また佛・法・僧の三寶の三即一の意味において、根本的の統融を示してゐるものなることを、聖人の遺文の一たる、「生死一大事血脈抄」において感得したのは、二十餘年前の大正六年、「日蓮聖人と親鸞」を執筆した時であり、昭和八年の學位論文の參考論文の一つにも、「教行證の三義に約せられたる日蓮聖人の組織的宗教」として、同趣旨の一文を加へて置いた位であるから、「觀心本尊抄」にその三

方面の統融がせられてゐることは、二十餘年前から感じてゐた。だが、今度、「本尊抄」を拜讀しはじめてから四十六年、眞に教學的研鑽に入つてから三十四年にして、はじめてその雄大にして文底に嚴然たる、法華經本門壽量品の常住三身、ことにその報應一身を中心として、その本佛の一念三千法門から、内在内觀的な衆生己心の本佛本化も、實現實踐的な國家世界の寂光顯現も、圓滿に統融せられ、これを貫くに豫言的な神秘的宗教を以てせられてゐるのに、驚心瞠目したのであつた。そして若し往年かゝる領解を得てゐたならば、本多師との間にも、意見の對立にはることなく、師もまた「本尊抄」が「開目抄」の報應顯本の立場を、一層深刻化し、展開化せられたものなることに悟入し、莞爾として握手することができたであらうにと、甚だ遺憾に堪へないのである。

同時に優陀那日輝師の如き、妙宗の本尊は無作三身、就中、自受用報身にありとし、しかも所顯に約すれば無作法身とし、遂に行者の一身とまでその實體を論ぜられた爲め、村上博士等をして、日蓮宗の本尊は法身なりと領解せしめるに至つたのであるが、しかも師は、「觀心本尊抄」の四十五字の法躰を以て、その著「綱要正議」本迹日月燈」首題要義」において、明かに本佛果上の一念三千にして、また本法受持の一念三千なることを説き、「一念三千論」の各處にも屢その義を陳べ、また天台宗の心・佛・衆生の三法妙においては、衆生法は一往因果、再往は因、佛法は定果心法は定因とし、此の因果迷悟の『差約專用』より修行を出發し、『理體無差』の果徳に至らしむる、謂ゆる『從因至果』の行法に對し、日蓮聖人の宗は、心法定因の迹門的三法妙を取らず、本門約佛果上の三法妙を以て出發點とし、『念々佛心ニ住』し、『佛心遍く生佛ノ二法ヲ成ズル』、『故成道時、稱此本理、一身一念、遍於法界』の本佛所觀の事圓よりして、衆生見の『差約專用』を根本的に解消する、謂ゆる『從果向因』の行法を建設せられたるものなることを、『雙照二觀精要編』および「一念三千論」の各處に説いてゐられるのであるから、師はたとへ「本尊抄」に依りて

『己心本尊』『己身本佛』を説いたにしても、その己心または己身は、決して單なる凡夫の己心でも己身でもなく、壽量品の本佛の所觀としての凡夫のそれであり、隨つて凡夫をして本佛たらしむるものは、壽量品の本佛の能觀、即ち本佛果上の一念三千であり、本門の行者はその本佛果上の一念三千をそのまゝ信すること、即ち本佛の能觀を以て行者の能觀とするから、『己心本尊』とも、『己身本佛』ともなるのである。故にその中心は本佛の能觀にあるのであつて本佛の所觀にあるのではない。輝師もそのことを領してゐたから、「綱要正義」には、一妙導師が法々皆三身といへるに對して、佛及び行者には、法々皆三身なりと觀る能觀の義はあるが、佛及び行人ならざるものには能觀の義なく、單なる『所觀ノ具法』のみとし、「首題要義」においても、佛及び行人の能觀よりせば、法々悉く妙法なれども、佛及び行人ならざるものには能觀の義なく、法々悉く『妙法ト爲スコトヲ得ザル也』と説き、ともに「本尊抄」の四十五字法體段の本文を引いて論じてゐられる。即ち「本尊抄」における能觀の中心は、本佛のそれ即ち本佛の一念に在ること、『己心本尊』または『己身本佛』は、畢竟して本佛の所觀、即ち本佛の一念の三千であるからに過ぎず、若し本佛の能觀、本佛の一念を逸すれば、『己心本尊』といひ、『己身本佛』といふが如きものは、優陀那院師の教學の立脚地に於ても、決して存在しないのである。しかるに師の學脈を汲むといふ人が、師が上の如く明瞭に論ぜられてゐるに係らず、或は本佛果上の一念三千といふ如きものなしといひ、或は四十五字法體の『己心』は凡夫又は行者の己心にして、本佛の己心の義なしといひ、或は台當兩家・迹本二門の三法妙は、因果迷悟の『差約事用』に局ると稱し、乃祖の本文に違つて顧みず。また本多師の如き、輝師の書を読み、偏へに本佛中心を逸して、『己心本尊』『己身本佛』を主張せるものと斷ぜられたのは、所詮、優陀那日輝師が、自己の内心には本佛中心を存してゐながら、重きを所顯に置きすぎて、「觀心本尊抄」を以て、『心ノ本尊ヲ觀』する抄とし、本尊に寄せて觀心を説けるものとし、大曼荼羅本尊

の實體をば、行者に在りと斷するに至つた。そこに他をして誤解せしむる要素があつたのである。師にして今なほ生存して居らるゝならば、「本尊抄」の序・正・流通を通じて、本佛實在を中心として、内在・内觀の宗教と、實現・實踐の宗教とを統融せられたものなることを談論すれば、また莞爾として握手するに難くないことを信するのである。

### 三

そこで「觀心本尊抄」の再認識を説くについては、先づ誤れる認識の主要なるものを會通して、然る後に私が聖文の眞意と領承したるところを提唱することとする。

先づ本多日生師の如き、本佛實在こそ日蓮聖人の正系思想であつて、一念三千の如きは天台の教學が、當時において重きを爲してゐたから、それを傍系的に取用せられたのであるといふ如きことは、師が聖人遺文の最高標準とせられる「開目抄」においても、私の「講話」に明かにしたが如く、各論三段の各段において、本佛の實在と一念三千を並べ説かれ、「本尊抄」においては、最初に「摩訶止觀」の一念三千構成の一文を掲げられたのみでなく、序分に於ても、『唯一大事因縁』難信難解隨自意』の正法は、一念三千なりとせられ、正宗分に於ても『一念三千ノ佛種ニ非ズンバ、有情ノ成佛モ木畫ノ本尊モ、有名无實也』とし、その一念三千の法體は、之を天台家の如く、衆生の六識安心所含のそれを取らず、『今、本時ノ娑婆世界ハ、三災ヲ離レ、四劫ヲ出デタル常住ノ淨土ナリ。佛既ニ過去ニモ滅セズ、未來ニモ生ゼズ、所化以テ同體ナリ。此レ即チ己心三千具足三種ノ世間也』と、壽量品の本佛果上の一念三千を以て法體とし、その本佛果上の一念三千、即ち本佛能觀の本時娑婆の三千世間は、法華經本門八品の間に表現せられたりと

し、これを本尊の躰相とせられ、その本佛己心の能觀を、南無妙法蓮華經の五字七字に結要して、上行菩薩に付屬して、末法の衆生に授與したまへるものとせられ、流通分の總結においても、『一念三千ヲ識ラザル者ニハ、佛、大慈悲ヲ起シ、五字ノ内ニ此ノ珠ヲ裏ミ、末代幼稚ノ顛ニ懸ケサシメタマフ。四大菩薩ノ此ノ人ヲ守護シタマハンコト、大周公ノ成王ヲ攝扶シ、四皓ガ惠帝ニ侍奉セシニ異ラザル者也』といはれて、徹頭徹尾一念三千の教義を以て一貫せられてゐる。若しも本多師の如く、この一念三千の教義を以て、傍系思想であつて正系思想でないとするれば、聖人が斯くの如く「開目」「本尊」兩抄を通じて、本佛實在と共に、重要教義として主張せられる筈がない。また若し一念三千を除外して、本佛實在のみを主要教義とすれば、聖人の宗教は單なる超越神教的のものとなつて、一般基督教と類似的の宗教となり終るであらう。一念三千に依つて佛教本來の普遍的なる汎神教的教義を確存し、本佛のみ此の本有の一念三千の眞理を悟達したまへり。これ迹佛・等覺の自ら悟る能はざる妙境妙智なりとあつて、そこに佛教本來の汎神教的教義を喪ふことなく、超越的なる一神教的教義が闡明せられ得るのである。師が好んで引かれたる「本尊抄」の末文の、衆生を本佛大王の子として、成王・惠帝の如き王子に喩へられたるが如きことも、十界互具・百界千如・一念三千の教義がなければ、基督教の如き造物的の神を有せざる佛教には、佛と衆生との父子の關係が出で來らないのである。

また優陀那日輝師は、その「本尊抄略要」において、「觀心本尊」を以て『心ノ本尊ヲ觀ズ』るものとして一抄を解し、『本尊に寄せて觀心を説かれたもの』と斷ぜられたから、師はその能觀を「綱要正義」「本迹日月燈」「首題要義」「一念三千論」等に、本佛に取られてゐるに係らず、本佛中心が忘れられるに至つたのである。師は「本尊抄」が、觀心を主にして明されたものとする證據に、「本尊抄」の序分に、『觀心トハ、我が己心ヲ觀ジテ十法界ヲ見ル。是ヲ觀心ト



云フ也」と、觀心の名義を説かれてゐることを擧げてゐらるゝが、委細に「本尊抄」の序・正・流通の三段を拜見すると、序分において、凡夫の己心に九法界の存在することは承認してあるが、佛法界の存在はこれを信じ難しと否定し、その末段において、堯舜・不輕菩薩所見の人、悉達太子といふ、凡夫の己心中ならざる、在他の聖人、初隨喜の菩薩の所見、八相成道の佛陀を以てしたる實例を出したのに對し、正宗分においては、釋迦佛陀の尊貴を先づ一般的に擧げ、つぎに爾前・迹門に約して佛陀の因行果徳を擧げ、つぎに本門に約して佛陀の果徳因行を擧げ、かくの如き佛陀の因行果徳が、我等迷妄の凡夫の己心の所具なりとすることは、到底信じ難し。たゞに佛界の因果に信じ難きのみでなく、二乘乃至地獄界の下八界と雖も、我等の凡心に其の性を潜在すといふは肯定したるも、在外の八界が我等己心の所具なりなどいふことは、これ亦た信すべからずと、序分に肯定したる佛界以外のそれをも否定したのであるから、序分段の觀心の名義釋なる、『我が己心ヲ觀ジテ十法界ヲ見ル』といふことは、これを己心における潜在の心性としても、九界を肯定して佛界を否定し、これを在外實存の十界としては、全然悉く否定してゐるのが、問者の難であつて、これに對する答者の答は、三重に爲されて居り、第一重には、是れ「法華經」の極説、本佛隨自意已證の境地なるが故に、難信難解は當然なりとし、第二重には、「無量義經」の王子不思議力の文と、「普賢經」の此の經は十方三世の諸佛の眼目、三世諸の如來を出生する種なりの文、及び此の經は諸佛をして五眼を具足せしめ、佛の三種の身は此の經の大涅槃海より生ずるの文を出して、「法華經」は佛の因行果徳を與ふることを暗示し、第三重には、更に「無量義經」の「六波羅蜜自然在前」の文、「法華經」の「欲聞具足道」の文、「大涅槃經」の「薩卜者具足ニ名ク」の文並びに龍樹・均正・吉藏・天台の釋の、薩とは六の義、具足の義、妙の義なりとあるを擧げをはりて、さて此等の經釋を總結して、

『私ニ會通ヲ加ヘバ、本文を讀スガ如シ。爾リト雖モ、文ノ心ハ、釋尊ノ因行果徳ノ二法、妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス。我等此ノ五字ヲ受持スレバ、自然ニ彼ノ因果ノ功徳ヲ讓リ與ヘタマフ』

と釋せられ、かくの如く妙法受持の時は、此の妙法蓮華經は、上來の如く、王子不思議力及び六波羅蜜自然在前の因行具足と、十方三世の諸佛の眼目なり佛種なり、三身出生の涅槃海なりの果徳具足。即ち因果具足の唯一妙道であるから自然に釋尊の因行果徳を讓與せらる。この故に『無上寶珠不求自得』であり、『妙覺ノ釋尊ハ我等ガ血肉也。因果ノ功徳ハ骨髓ニ非ズ乎』と、凡身即佛身なると同時に、此の「法華經」を護持するは、釋尊・多寶佛及び十方諸佛を供養するになんぬとの寶塔品の文を擧げ、『釋迦・多寶・十方ノ諸佛ハ我ガ佛界也。其ノ跡ヲ紹繼シ、其ノ功徳ヲ受得ス』と釋せられ、此の經の護持を佛因することを結し、しかも此の受持讓與は、行じ難き觀念に非ずして、聞法得道・因果一念の受持の易行なることをば、法師品の『須臾聞之、即得究竟阿耨多羅三藐三菩提』の文を擧げて證し、然る後にはじめて、『我等己心ノ釋尊ハ、五百塵點乃至所顯ノ三身ニシテ、無始ノ古佛也』、『上行・無邊行・淨行・安立行等ハ、我等ガ己心ノ菩薩也』と、壽量品の本佛・本化が、我等己心の所具なることを示されてゐるのであつて、妙法蓮華經の受持讓與に依らずんば、在外の十界を以て我が己心の所具と見ることは、毫も許されてゐないのである。

隨つて次下の四十五字法體の『己心』は、今日優陀那師を祖述する人が、斷じて凡夫又は行者の己心にして、本佛の己心に非ずなどと妄言するに係らず、優陀那師は「綱要正義」「本迹日月燈」「首題要義」「一念三千論」等に、この『己心』は、本佛の『己心』を本義として行者の『己心』に及び、一般凡夫の『己心』に互らずと、私と全然同一解釋をしてゐるのであるから、「本尊抄」の正宗分には、本佛中心の受持讓與の前提のない凡夫が、『我が己心ヲ觀ジテ十法界ヲ見ル』ことは、些かも肯定せられたところはないわけである。況して流通分にいたりては、専ら本尊の流通を説

かれて、觀心の義は一語もない。また『事行ノ南無妙法蓮華經の五字、并ニ本門ノ本尊未ダ廣ク之ヲ行ゼズ』のと文の『事行ノ南無妙法蓮華經』は、上の受持行をいふので、決して『我が己心ヲ觀ジテ十法界ヲ見ル』ことではない。受持讓與に因つて、本佛・本化が行者己心の所具となる所以は、因行果徳を讓與せらるゝ本佛の證果の上に、四十五字法體の事成の一念三千が在るから、それを神力品の別付屬により、上行菩薩を経て末法の衆生に妙法五字に結要し授與し受持に因つて讓與せられたもので、本佛果上の一念三千がなければ、受持讓與の根據はなくなるのである。だから優陀那院師も、「首題要義」に明かに、四十五字法體を以て、『之ヲ佛心ノ所證ニ約スレバ、則チ法界佛身ニ會歸シ、亦タ行者ノ所觀ニ約スレバ、則チ法界行者ノ一身一念ニ會歸ス』といひ、行者とは『佛心ノ所證』を以てその所行とする行者を意味するのであるから、中心は『佛心ノ所證』に歸する。故に同書に又、『三千唯心ノ觀相、法界唯身ノ信解、並ニ是レ佛智所見ノ覺相ヲ示ス也』といつて、本門事圓の一念三千とは、即ち本佛果上の一念三千なることを明言し、それ故に「綱要正義」「本迹日月燈」「一念三千論」みな、四十五字法體の文を本佛の一念三千を正釋とすとてゐるのである。

隨つて「本尊抄」に明されてゐる、本尊の躰相即ち十界圓具の大曼荼羅は、本佛の一念三千即ち教主釋尊本有無作三身の形貌なのである。その『本門ノ本尊』を對境として、作法受戒・信念受持の唱題によつて、本尊の因行果徳を讓與せられ、そこにはじめて自己の『九識心王眞如の都』(日文翻)を、御本尊の上に仰ぎ、觀念行ならざる信念受持の上に、本佛己心の『三千具足三種ノ世間』をば讓與せられ、大曼荼羅を行行者己心の『三千具足三種ノ世間』として仰ぎ得るのである。だから『事行の南無妙法蓮華經』も、決して凡夫己心の觀心の義でない。

然るに優陀那院師は、今日の末流學者とは異り、四十五字法體の『己心』とは本佛の己心を本義とすることを確認

せられてゐるに係らず、天台の迹門の理觀に對して、本門の事觀といふ一種の觀行を聞かんとして、『本尊辨』(全集第三卷四一三)に、『當ニ知ルベシ、若シ觀境ヲ定メテ以テ行ヲ立ツルニハ、則チ正シク行者自心ノ一念三千ヲ顯スヲ正意ト爲シ、若シ依止ヲ定メ本尊ヲ立ツルニハ、則チ正シク本門ノ教主無作三身ヲ顯スヲ正意ト爲ス』と觀門と教門と兩意を立て、『本尊略辨附録』(全集第三卷四一九)には、本尊得意の要を結して、『久成ノ釋尊ヲ立名トシ、妙經ノ題目ヲ形相トシ、行者ノ自體ヲ實體ト定ムルナリ』といひ、終に今日の所謂『己心本尊』『己身本佛』思想の脩を爲し、本佛實在の中心を忘れ、法身本尊の如く誤解せしめるに至つたのは、まことに惜しむべきことで、師のこの思想に依れば、日蓮聖人の宗教は、内在内觀の宗教に歸するのであつて、恰かも本多師が超越的本佛實在を主張せられたのと、對蹠的主張をなすのであるが、日蓮聖人の「本尊抄」は究竟してさやうな、單超越的、又は單内在的に歸するが如き宗教を開示せられたものでは、決してないのである。

## 四

さらば日蓮聖人の宗教はいかなるものかといへば、聖人が始めてその本懷を顯はされたる、この「觀心本尊抄」所詮の宗教は、前に示せるが如く、『超越的なる本佛實在を中心として、普遍的なる内在内觀の宗教と、儀表的なる實現實踐の宗教とを、圓滿に統融具足したる、豫言的宗教』を闡明せられてゐるのである。そして此の抄の主たる所明はまことに如來滅後第四の五百歳まで未だ顯れず、第五の五百歳において、經釋の豫言の如く始めて顯れたる本佛果上の一念三千、即ち本門觀心の法門を以て釋せられたる『本門の本尊』を顯はさるゝにあつて、傍ら既に本抄の顯發までに弘められたる『本門の題目』を、上行所傳の法ぞと開顯し、且つ本抄にもいまだ顯はされざる『本門の戒壇』を密

釋せられてゐる、三大秘法正傍隱顯具釋の本典なのである。

先づ本抄が、正しく一念三千の法門を以て本門本尊を釋し出されたる所以の證をいへば、先づ序分に百界千如と一念三千の異同を示す時、『草木ノ上ニ色心ノ因果ヲ置カズンバ、木畫ノ像ヲ本尊ト特ミ奉ルモ無益也』と、一念三千の原理なくば、木畫の像を本尊と爲すの詮なきを説き、正宗分に入つても、『一念三千ノ佛種ニ非ズンバ、有情ノ成佛ト木畫ニ像の本尊ハ有名無實也』と説かれ、つぎに妙法五字の受持によつて、本佛の因行果徳讓與の旨を明して、行者と本尊との感應の根據を示し、妙樂の釋を以て結前生後し、正しく本佛果上一念三千の法體を擧げ、その本尊の躰相を顯發せられ、流通分には、徹頭徹尾本門本尊の流通を主として説かれ、傍ら題目を開顯し、戒壇を密釋せられてゐる。即ち本尊は序・正・流通に互りて、一貫して所明となつてゐるが、凡夫己心の觀心の如きは、前にいへるが如く序分においても正宗においても、却て明かに否定せられてゐるのである。殊に流通分といふものは、正宗を流通するものであることは、佛家の通論であるが、明かに本尊の流通のみあつて、凡夫己心の觀心の流通がないのみでなく、いかなる意味でも、法行的・觀念的の觀心の流通は一句もない。以上を以て此の抄の所明が、正しく觀心の法門を以て本尊を釋するにあることを肯定せねばならぬ。

つぎに本佛實在を中心とするといふ所以は、先づ序分において一念三千を出して、難信難解の正法ぞと示すに、是れ本佛隨自意の己證の法なりと説き、『法華經』はそれを説ける經典なりとし、凡夫己心に佛界を潜在する證を擧げても、『末代ノ凡夫出生シテ、法華經ヲ信ズルハ、人界ニ佛界ヲ具足スルガ故也』とある。その「法華經」の中心は、如

來壽量品の本佛實在にあり、無始の本佛の實在が明されて、無始の九界との互具圓融が立ち、はじめて無始の十界互具・百界千如・一念三千が治定するとは、「開目抄」に既に明されたところであるから、此の序分に「法華經」をいはれてゐるところには、みな本佛實在を含むと見ねばならない。

更に正宗分に入つても、また重ねて一念三千は、難信難解、本佛隨自意の已證の法なりと説かれ、「無量義經」「普賢經」の因行果徳具足の文も、「法華經」の功徳即ち本佛實在の利益を暗示せられたもので、だから彌いよ行者と本尊との感應の根據を明されたところでは、「釋尊ノ因行果徳ノ二法ハ、妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス。我等此ノ五字ヲ受持スレバ、自然ニ彼ノ因果ノ功徳ヲ讓リ與ヘタマフ」とある。而して本佛の因行果徳を、妙法五字に具足せしめて流通せしめらるゝのも、神力品の本佛の付屬に由り、受持によつて功徳を讓與せらるゝ儀表としての上行菩薩の應化も、また本佛に因つて遣使還告と遣はされたのであるから、若し本佛實在がなければ、此の受持讓與の根據は全然成立しないのである。

而してつぎの四十五字の法躰は、

『今、本時ノ娑婆世界ハ、三災ヲ離レ四劫ヲ出デタル常住ノ淨土ナリ。佛既ニ過去ニモ滅セズ、未來ニモ生ゼズ、所化以テ同躰ナリ。此レ即チ己心三千具足三種ノ世間也』

とあつて、明かに超越の世界を示してゐる。此の實在の本佛の、證悟の上の三千世間は、凡夫迷妄の三災四劫に永へに出離せる、常寂光の世界である。此の超越界の風光を、「法華經」虚空會の、本化菩薩の在座の本門八品の間に示された。それを『本尊ノ躰タク』として顯發せられてゐる。そしてそれを地涌千界の菩薩に付屬して、流通せしめられたとあるのだから、本佛の實在がなくては、本佛果上の一念三千も、本門の本尊も存在しないのである。

最後に流通分に入つたならば、謂ゆる一代三段・一經三段・迹門三段・本門三段・本法三段の五重三段を説かれる時から、「法華經」以外の諸經が、いかに圓教の理を説いても、本佛常住の種・熟・脱の三益といふものを明さないから、「佛種」の義を成じないと説かれてゐるのは、本佛實在がなければ、種・熟・脱三益もなく、「佛種」もないことになるのであり、次下には迹門・本門の末法爲正を説かれてゐるところに、「法華經」の豫言、天台・妙樂・道暹の豫言的解釋を出されてゐる。その豫言はこれまた本佛實在を豫想せずしては成立しない。更に進みて壽量品の『遣使還告』の文を、四依の菩薩を遣はさるゝことなりと釋したる、天台大師の釋に依り、聖人前人未發の四類四依なるものを明されてゐる。此の佛の滅後に、佛が四依の菩薩を遣はされるといふ思想も、本佛實在を豫想せずしては考へられないものであり、また進みて神力・囑累兩品の付屬を説かれ、佛滅後正像二千餘年に、佛の所囑の如く、つき／＼に小乘の四依、大乘の四依、迹門の四依は出でゝ時機を違へず、今や末法には本門の四依の出づべき時なりとて、これを歴史と現實とを以て證せられてゐるのも、また本佛の實在を豫想せずしては無意義なのであり、聖人の化導が經の豫言並びに天台・妙樂・傳教の豫言にかなふものであり、更に聖人自身が、地涌の菩薩の兩度の出現を説いて、將來の世界を豫言せられ、暗に日本國の開顯をしてゐられる如きも、これ本佛より遣はされたる者としてのみ言ひ得らるゝことで、また本佛實在を豫想せずしては、無價値に歸するものである。況んやその總結の文も、『一念三千を識ラザル者ニハ、佛、大慈悲ヲ起シ、五字ノ内ニ此ノ珠ヲ裏ミ、末代幼稚ノ頸ニ懸ケサシメタマフ』とあつて、本佛實在に歸納せられてゐる。

これをどうして『已心本尊』だの、『已身本佛』だのを顯はされた抄、などと解せられ得やうぞ。

五

しかしながら、若し誤つて『己心本尊』『己身本佛』の義が、絶對的に本抄に無しといふものがあれば、それは本抄の明文に據してゐるものである。本抄の正宗分に、前に出せるが如く、『妙覺ノ釋尊ハ我等ガ血肉也、因果ノ功德ハ骨髓ニ非ズ乎』とある。これ『己身本佛』でなくて何であらうぞ。また前顯の如く、『我等ガ己心ノ釋尊ハ、五百塵點乃至所顯ノ三身ニシテ、無始ノ古佛也』とあり、『上行・無邊行・淨行・安立行等ハ、我等ガ己心ノ菩薩也』とある。本佛と本化は、大曼荼羅本尊の中心であつて、十方三世の諸佛は本佛釋尊に收まり、迹化他方の菩薩ならびに二乘以下の八界は、囑累品の如くば、悉く本化の菩薩の眷屬に攝せられるのである。だから一尊四士の本尊も大曼荼羅の略となるのである。さすれば本佛と本化は我等の己心の佛界・菩薩界なりとあるは、『己心本尊』でなくて何であらうぞ。すなはち本抄には、内在内觀の宗教も説かれてゐるが、しかし、それは『釋尊の因行果徳ノ二法、妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス。我等此ノ五字ヲ受持スレバ、自然ニ彼ノ因果ノ功德ヲ讓リ與ヘタマフ』との本佛實在中心の、信念受持の上での讓與の分であつて、本佛實在中心を忘失せる、觀念修行の上には存在することではないので、即ち本佛實在に統融せられてゐるのである。

のみならず、

『寶塔品ニ云ハク、其レ能ク此ノ經法ヲ護ルコトアラン者ハ、則チ爲レ我及ビ多寶佛ヲ供養シ、乃至亦復、諸ノ(世界ヨリ)來リタマヘル化佛ノ、諸ノ世界ヲ莊嚴シ光飾シタマフ者ヲ供養スルナリ等云々。釋迦・多寶・十方ノ諸佛ハ我ガ佛界也。其ノ跡ヲ紹繼シ、其ノ功德ヲ受得ス』



とあつて、釋迦・多寶・十方の諸佛は何の爲めに集まられたか。此の經法をして久住せしめ、惡世に流布して、十方世界通一佛土たらしめんが爲めである。其の三佛が我が佛界であるならば、其の三佛の心を心として、此の法華經の理想が没せられんとするのを護持し、三佛の跡を紹繼して、三佛を供養する菩薩行をせねばならない筈である。かく三佛の跡を紹繼すれば、三佛の功德を受得することができるのである。

かくの如くにして、内在内觀の宗教は、實現實踐の宗教に即接し、統融せられてゐるのである。

## 六

内在内觀の宗教は、本佛大慈の受持護與に因るのであるが、しかし更にその根本の理は十界互具に由るのである。十界は互具するが、無始本佛は獨り『淨緣』即ち自から法性緣起に従ひて覺ることは出来ない。そこで本佛の根本一乗教即ち佛種教を説かるゝ『説緣』に従つて、はじめて本佛の證悟に參することが出来る。それが本法受持の一念三千であり、我等末法の衆生に對しては、要法受持の一念三千である。此の一念三千の原理があるから、今日の我等の如き、各自の自我を主として考へ、鬭爭堅固をあらゆる點に波及せしめて、生存鬭爭・男女鬭爭・國際鬭爭・階級鬭爭・民族鬭爭・人種鬭爭・主義鬭爭・宗教鬭爭等の、底止するところなき鬭爭心理も、一たび南無妙法蓮華經と、宇宙一貫の聖なる本佛と聖なる本法の實在に醒め、小我の身心を没して、『法界圓融一念三千』十方世界通一佛土の、本佛本化の誓願を以て我が誓願と爲し、儀表なる上行應化の日蓮聖人が、不惜身命に流通せられたる如くに、受持念持護持弘持するならば、恰かも日本國安房の漁夫の子の日蓮その人が、『法華經』に預言せられたる末法の大導師、本化上行菩薩の應化と實踐實現し

豫言可能の不思議力をも出したまへるが如く、その内在内觀の己心の本佛本化の功德は、外部の實踐實現となつて、『地涌の菩薩の流類』として、『一閻浮提、廣宣流布』、『十方世界、通一佛土』の相を來すべき、實踐實現の人となり得べきである。但しそれは本佛實在を中心として、本佛・本化の實在の信念なきものゝ上には、その内在内觀も、正當には決して作用しない。

隨つて彼の徒らに口唱題目を以て、受持讓與あるべしと妄想したり、又は佛陀の豫言、天台・妙樂・傳教等の豫言によりて出現せられたる、末法の大導師、唱導之師たる日蓮聖人を、單に我等行者の一先輩の如く考へ、後世の派祖または久遠日親・常樂日經兩師の如きを、日蓮聖人の再來だの再誕だのと濫稱するが如き、本佛・本化の實在を輕視する者には、決して正しい實踐實現は來らない。すなはち實現實踐の宗教も、また本佛實在の超越の宗教を中心としてに統融せられてゐるのである。

## 七

以上の如く「觀心本尊抄」は、超越的なる本佛實在を中心として、内在内觀の宗教と、實現實踐の宗教とを統融せる、豫言的宗教を顯示せられたるものであるが、かくの如く三方面を圓具せる所以は、「法華經」乃至大乘佛教の本來の教義に基くのである。

佛教には、本來、佛・法・僧の三寶があり、また『心佛及衆生、是三無差別』といふ、心法・佛法・衆生法の三法

があり、また教道・行道・證道といふ三義がある。

超越の宗教は、佛實中心であり、佛法妙中心であり、教道中心に依るのであり、内在の宗教は、法實中心であり、心法妙中心であり、證道中心に依るのであり、

實現の宗教は、僧實中心であり、衆生法妙中心であり、行道中心に依るのである。

而して日蓮聖人の宗教は、佛の本地を明せる「法華經」本門の教義に依つて立てられたるものであるから、本佛實を中心とする。すなはち佛實中心・佛法妙中心・教道中心の教義で、その上に内觀的に、法實と心法妙と證道と。實現的に僧實と衆生法妙と行道とを統融せられたものであつて、「本尊抄」は以上に説けるが如く、明かに本佛實を中心として、兩方面を統融せられてゐるのである。

しかるに故本多師や優陀那師の如く、或は超越的、或は内在的に偏説してゐられたことは、畢竟して聖人の宗教の眞面目を必要とする時が、未だ來らなかつたからであらう。

かくして、「觀心本尊抄」の、超越の宗教は、信念の對境として、世界的に『本門の本尊』として。内在の宗教は、受持の信解として、個人的に『本門の題目』として。實現の宗教は、本誓の實現として、國體的に『本門の戒壇』として。總じては三大秘法として、聖人の宗教を構成してゐるのである。